

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 36号

2000年1月～3月



ACC-J茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and valley 2000' 春 No36



松木沢夏小屋沢を登る《Photo by. MOTOZU》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

極道への憧れ

3月13日谷川岳一ノ倉沢滝沢リッジで希代の名クライマー吉尾弘氏が壮絶な死を遂げた事は、多くのクライマーに大きな衝撃を与えた事と思います。吉尾氏は若干19歳で谷川岳一ノ倉沢滝沢下部の積雪期初登攀を成し遂げ、その後数々の積雪期初登攀に成功し、62歳で一ノ倉沢滝沢で壮絶な死を遂げるまで生涯現役を貫き通した数少ないクライマーとして尊敬する一人です。62歳で積雪期一ノ倉沢をトップで登攀する実力には底知れないものがあり、当会のM氏と相似点を感じるものがあります。

山登りは個人の遊びであるが他の遊びと異なるのは、山での失敗（ミス）は遭難に結びつく事であり、最悪の場合には死に至る事です。我々は山で遭難死しない為に様々な訓練山行を実施して登攀技術を磨き、万一に備えて山岳保険に加入して自己防衛しているのが現状です。吉尾氏ほどの名クライマーでも山では不測の事態が発生し遭難する場合があるので、私達は不測の事態に備えてザイル＆ハーケンを使用したり、雪崩に巻き込まれた時の為にアバランチピーコン＆スコップ＆ゾンデ棒を携帯しますが、それでも避けられない事態が発生する事を吉尾氏の事故は物語っていると思います。しかし遭難を恐れて山に登らないのでは本末転倒であり、私達は今後も積極的に山登りを続けるつもりです。若かりし頃厳しい登攀に明け暮れたクライマーも歳を重ねると共に家庭の事情、職場事情等で一時山を離れる人が多いが、子育ての責任を果たし、職場でも窓際（？）になると閑も出来て山へ復帰する人も多い。（私もその1人ですが。。。。。。）山へ復帰したくても体力が低下しているので、昔の仲間についていけるだろうかと不安になり躊躇している人もいると思いますが、心配無用！！。昔の仲間は決してあなたを見捨てたりはしません。

ACC-J茨城（ACC-J東京）には崇高な岳人の幹があります。ACC-J東京の名雪氏の言葉を借りると『夫婦の幹、兄弟の幹、親子の幹を断ちきって山に登れば、山で野垂れ死にする事が出来る』との事。また『山男は天涯孤獨、國を捨て、親を捨て、女房子供を捨て、我が道を歩む事こそ本当の岳人ダ～。』と訳の解らない事を言っていますが、その道を極める（究める）事が出来れば極道になります。極道というとその筋の人々の恐い顔が浮かんでくると思いますが、登山でも他の遊びでも、また仕事でもその道を極めるという事は大変な事です。永年の努力・精進・そして才能のある者だけが極められる道だと思います。剣道

・柔道・弓道と日本古来の武術は道（ドウ）を付けて呼び、その奥義を会得する為に厳しい修行に励み、その道を極めて達人になったと聞いたことがあります。登山道とは呼びませんが、かつてACC-Jの仲間が登山の道を求めて『求道心』という名のクラブを創立した事があります。山の極道を目指した集団でしたが、志し半ばで道は極められなかったと伝え聞いた事があります。諸々の事情さえ許せば、世の中のしがらみを断ち切る事が出来れば、山の極道に憧れています。しかし、登山の道は極められなくても登山道を歩く事は出来るので、生涯現役を続けたいと思います。

（木村一記）

《目次》

2000年 春号 1月～3月 ACC-J 茨城

極道への憧れ	1
集会報告	3
山行報告	4
北アルプス・硫黄尾根	5
南アルプス・塩見岳	10
怪しい中年登山隊八ヶ岳を登る	12
八ヶ岳・石尊稜	13
八ヶ岳・赤岳東稜	14
茨城岳連主催雪上訓練（安達太良山）	15
中央アルプス～空木は遠い・渡辺おおへこみの記録～	16
谷川岳・一の倉沢南稜	18
八ヶ岳・小同心クラック	19
八ヶ岳・赤岳主稜	21
八ヶ岳・赤岳	22
友好山岳団体の月報・会報・その他	23
編集後記	25

表紙…赤岳東稜から赤岳を望む

《Photo by K. Motozu》

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 1月 】 -----

1月 5日

出席者 本岡、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田

1月 19日

出席者 本岡、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田

-----【 2月 】 -----

2月 2日

出席者 本岡、木村、鯉河、菊地、笹平、渡辺、吉田

2月 16日

出席者 本岡、木村、菊地、渡辺、吉田

-----【 3月 】 -----

3月 1日

出席者 本岡、木村、菊地、生井、笹平、吉田、渡辺

3月 15日

出席者 本岡、木村、菊地、鯉河、渡辺

3月 29日

出席者 本岡、木村、菊地、生井、笹平、吉田、渡辺

山行報告

《 2000年 1月～ 3月 》

【 1月 】

12月30～1月3日	北ア・硫黄尾根	L吉山、生井、笹平
12月30～1月3日	南ア・塩見岳	L本岡、吉田、渡辺
12月31～1日	八ヶ岳西面・赤岳南峰リッジ	L鯉河、木村、名雪、水島
12月31～1日	八ヶ岳西面・石尊稜	L木村、名雪
1月 9～10日	八ヶ岳赤岳東稜	L本岡、笹平、吉田
1月 23日	ゲレンデ	L本岡、吉田、渡辺
1月 30日	松木沢・アイスクライミング	L本岡、木村、笹平、吉田、渡辺

【 2月 】

2月 6日	安達太良山	L渡辺
2月 11～13日	中央・アルプス	L本岡、渡辺
2月 27日	松木沢・アイスクライミング	L本岡、吉山、生井、吉田

【 3月 】

3月 5日	谷川岳・白ヶ門	L本岡、木村、吉田、渡辺
3月 4～5日	谷川岳・一の倉沢南稜	L吉山、生井、笹平
3月 18日	八ヶ岳・小同心クラック	L本岡、渡辺
3月 19日	八ヶ岳・赤岳主稜	L本岡、吉田、渡辺
3月 19日	八ヶ岳・赤岳	L木村、菊地、鯉河

北アルプス・硫黄尾根

～硫黄尾根の幻～

1999.12.30~2000.1.3

パーティ L生井一男、古山正文、笹平孝

朝日の眩しい光がレースのカーテン越しに窓から差し込んでいる。ウッ、眩しいなあ！と思いつながらも、もう少し横になっていたい気分なのでベッドの中でまどろんでいると、何やら良い匂いが匂っている。何かの香水のような匂い？。が、私の鼻をくすぐって心地よい目覚めである。薄目を開けて窓際をみると、そこには缶ジュースを片手に生まれたままの姿でレースのカーテン越しの光に照らされ、シルエットになっている女の姿があった。それは写実的な絵を見ている様だった。

『う～んん、あ～～あ』。
と、ベッドの中で背伸びをしながらアクビををすると、シルエットの彼女は振り返りながら

『あっ、ごめ～ん。起しちゃった？。エヘヘ』。
と、いたずらっぽい大きな瞳でこちらを覗き込んできた。
『いや、ちょっと前から目は覚めていたんだけど、少し
まどろんでいたんだ』。

と言うと、裸身の彼女はベッドの隅に座り、軽くキスをしてきた。そして唇を外すと彼女は、

『いちおさん～、のど、乾かない？。乾いたでしょう。
何か飲む？』。

と、聞いてきた。私は彼女の持っている缶ジュースを見ながら、

『ん～。何でもいいから。俺にも持って来てくれよ』。
と言うと、彼女は自分の持っていた缶ジュースをテーブルに置き、冷蔵庫の方へ缶ジュースを取りに行った。

『いっちゃん～、これでいい？。ねえ？』。

と言いながら、冷蔵庫の扉越しに缶のオレンジジュースを私の方に見せてきた。私が、

『OK、それでいいよ』。

と答えると、彼女はそのオレンジジュースを開けながらベッドに腰を下ろした。私がそのジュースを受け取るとすると彼女はそれを制止し、そのジュースを口に含むと私に口移しで飲ませてくれた。

『いっちゃん、美味しい？。そう、良かったあ。じゃあ、
今度は私にもちょうだ～い』。

と、甘えた声で言いながら私にジュースの缶を渡しベッドに潜り込んできた。渡されたジュースを口に含むと横になった彼女の唇に唇を合わせ彼女の口の中にジュースを流しこんだ。彼女は喉をならしながらジュースを飲み干し、『美味しい！。とっても美味しいワ。幸せ～』。
と言いながら、小悪魔的な瞳を輝かせていた。

彼女の名前は、伏見沙織。北海道は帶広生まれ。年齢は24歳。もちろん独身である。昔、北海道に行った時

に知り合ったのだが、ちょっとした偶然でまた巡り会って一夜の契りを結んだのだった。

彼女は口の中のジュースを飲むと、体を入れ替え、私の上になってまたキスをしてきた。今度は私の口の中に舌をからませてじゃらしている。「こいつめ」と私も彼女の口の中に舌をからませ応戦した。すると彼女は、私の舌を噛んで引っ張ってきた（小悪魔的なを忘れていた）。「オヒィ、オヒィ、ヤメヒェクレ、コリャ、シャホリ！」と言いながら（実際は言葉にならなかったが困った顔をして苦しんでいると、また小悪魔的な瞳を輝かせながら喜んでいる。この小悪魔め！と、思いながら力任せに舌を引っ張った。

『いて～い！』と、絶叫とともに辺りが真っ白になった。次の瞬間、フッと気がつくと、闇の中にランタンがぶら下がっているのが見えた。

『あれ？、ここは何処だ～～？』。
と、回りを見まわして見るとテントの中のようである。
『あれ？、沙織は何処だ～～？』。

と、隣を見るといかつい男が2人横たわっていた。暫くすると現在の状況を把握する事が出来た。なんだ今のは夢だったのか……。あまりにもリアルな夢だったなあ～（手にはまだ人の人肌の感触が残っていた）。少し残念な事をした。

私が今いるのは、北アルプスは硫黄尾根の硫黄岳ジャングルム群の手前に2張りぐらいは張れるビバークサイトである。

今回、ミレニアム登山とすることで、古山さん、笹平、生井の3人で来ている。

いつまでも（事故者が）山をやっているのも問題があるなあと近頃は感じてきていた（私のパートナー達は既に第一線から離脱している）。パートナーもいなくなったり、ぼちぼち山も潮時かなと思っていた。

ヨーロッパアルプスから帰ってからは何時もこういった感じである。あの山行で殆どの山への情熱（単に意地だったかもかも知れないが…）を使ってしまって、今はただ残りカスがくすぶっているだけなのかも知れない。あの時、シャモニーで知り合ったクライマー達には、おまえは典型的な山やの顔をしていると言われて、そんな顔をしているかな～と疑問に思ったが、その当時は傍から見るとそんな輝きがあったのかも知れない。

その矢先、古山さんから電話があってミレニアム登山という事で「硫黄尾根に行きましょうよ」と誘われて思わず条件反射的に受けてしまった（気の小さい私は古山

さんの脅迫に屈したのであった。なんてネ、冗談ですよ古山教授）。

気持ちでは山なんて…？？と思つていても（山好きな人達とは人種が違うのかも）、何故かこうして来てしまうというのは何故なんだろう。やはり私には学習能力が無いのだろうか？

29日の晩に茨城を発つて（私の新しい愛車…レガシィ・ステーションワゴンGTで行く）、信濃大町の市民センターの駐車場でテントを張り、一杯やってから就寝した。

30日。信濃大町にある市民病院に車をデボし、タクシーで七倉へ。七倉で登山指導所に登山届けを出し、ここでお茶をご馳走になりながら朝食を取り、山の状況を聞いてみると、あの池学さんが硫黄尾根で遭難したと言う。

朝食を終え、登山届けを確認していると、我々が行く硫黄尾根には先行パーティとしてアンナブルナ遠征隊なる大人數のパーティが入っていることが分かった。これでラッセルは無いな。楽勝な山行が待っている。今度の山行は頑いたなど心の中ではなくそんでいた。

七倉を発ち、山の神、神沢、仙沢、源五郎とトンネルを抜け、高瀬ダムに到着。いつも思うのだが、堰堤までのジグザグの登りは結構だるい。思わず一直線に登れないかと思ってしまう。昔、私が21歳の頃、友と2人で裏銀座コースに来た時に初めてこのロックフィル式の高瀬ダムを見たのだった。その時は凄いダムだなあと感心したものだった。

その後は湯俣までは回りの景色を見ながら山散策的な雰囲気。発電所を過ぎ、吊橋を渡って水俣川左岸のトレイスを行き、硫黄尾根に取り付いた。急な樹林帯の登りになり、目頃の運動不足が露呈してしまった。それと変に雪が着いているので登りづらい。途中、途中、赤布を確認しながら行く。大汗をかきながら樹林帯を稜線に上がり、熊笹の中の現在いるビバークサイトに着いたのであった。

31日。早朝、といつても7時過ぎにビバークサイトをあとにした。直ぐにジャンダルムⅠ峰の登りに入る。Ⅱ峰も難なくクリア。そしてⅢ峰はピークから水俣川側の急なルンゼの下降で30m程の懸垂を行なう。基部から湯俣側を回り込み、Ⅳ峰への雪稜をに出る。後は稜線づたいに難なくⅥ峰までたどり着いた。記録にはあった。Ⅲ峰からの懸垂の所で、何時の間にか後続がついて登ってきていた。彼らが、

『そこから懸垂ですか～』

と、聞いてきたので後続に

『そうらしいですが…、でもどうもここは下から巻いても行けそうなかんじですね？』

てな事を教えてしまった。我々が懸垂で降りて少し岩場を登り、尾根のトレイスに出ようとした時、懸垂下

降をしないで巻いた後続が、かなり下に出てきたのが見えたので、

『やっぱり、上から懸垂ですよ。懸垂した方が正解だ～。戻った方がいいですよ～』
と大声で声をかけた。

その時の後続のパーティの人達へ、大間違いを教えてしまって申し訳ありません。この場を借りてお詫び致します。たぶん彼らは（ちなみにみ茨城べん言うと）、『まったく、トンでもないチクラッポ教えやがって、あのデレスケどもめが！』
と、言っていたに違いない。

その後、小次郎のコルを経て360°の展望の素晴らしい硫黄岳頂上に到達した。ここで休憩をとて辺りの展望を満喫する。広々とした雪面を硫黄台地へと向かう。硫黄台地を横断して大ギャップへと下降していく。浦木混じりの急な雪面を下ると岩と氷の急なルンゼの下降となった。フィックスロープにつかりながらアイゼンを利かせていく。左側の斜面をトラバースして尾根に戻れば大ギャップである。大ギャップから雪稜を登り南峰に到達した。

ここで古山さんが、赤岳ジャンダルムを偵察（ビバークサイトの有無）に向かう。彼が偵察に行っている間、我々2人は、ビバークサイト建設に労力を強いる。ほどなく古山さんが偵察から戻って

『やっぱり、ビバークサイトはここが良いですね。この先はあまり良さそうなところはないですね。ここでビバークしジャンダルムに入ったら一気に抜けたほうが良いと思います』と我々2人に話してきた。

『なるほど。やっぱりここが一番良いなら、本格的に整地しようぜ』。

と、さっさと3人ががりでテキバキと済ませ整地及び設営が終わる。明日は元旦だからと、テントの入り口にモニュメントデザイナー生井製作の門松をこしらえ、初春の準備も怠りなくすませる。

ここからは西鎌尾根も、槍ヶ岳もまじかに見え、圧巻な景色である。もしキャンバス&画具があれば、2日ぐらいここに停滞したい心境であった。

ここから見ると西鎌尾根なんか直ぐそこに見える。しかし明日は赤岳ジャンダルム～赤岳主峰群を経て西鎌尾根だから結構大変だろうが、でも明日は少なくて西鎌尾根に到達し、尾根上でビバークはしたいなあと3人で話していた（一人、古山さんは千丈沢の乗越辺りまで行ければなあと思っていたらしい）。

3人とも無事にテントに入り、各自のスペースを確保する。各自、落ち着いたのでまずはお茶を飲み、今日の行程の確認と明日の予定を話しながら心地よいひと時の到来である。1日の疲れも山友との語らいで明日の銳気が養える。山屋のこういった苦楽をともにする行為がパートナーとしての幹を高めるんだと思う。

今回の食事、笹平シェフ自慢のキムチ鍋で3人ともおおいに舌鼓をした。「あっちっち、あっちっち！」なのだがフウフウいいながらも餓腹食べてしまった。いや～、キムチ鍋がこんなに旨いものだったとは今まで知らなかった。こんな美味しいものを食べられるのも笹平シェフのお陰である。

お腹も一杯になったので後は寝るだけである。食後の語らいを済ませ就寝となる。私にはもう一つ楽しみがある。それは昨日の夢。あの続きをみたい。さあてと、さすればさっさと寝ますか（どんな夢だったかは、私だけのひみつ）。

1日。日の出前に起床し、初日の出を堪能する。その後3人で今日の行動を確認する。目標は西鎌尾根まで達し、尾根上でビバークをする事とし、最悪でも岳樺平の適当なビバークサイトを目指し南峰を出発した。南峰を少し下って行くと直ぐに赤岳ジャンダルムに突入した。I、II峰は湯俣川を巻きクロワールをII峰の肩につめる。ブッシュの茂ったIII峰を稜通しに越え、IV峰を右に回り込みながら雪壁をトラバース気味に登り、ピークから少し下って20m?の懸垂2回でコルに降り立つ。そしてV峰は千丈沢側、VI峰は湯俣川側を辿り、VII峰は再び千丈沢側をトラバースしてVII峰を越え中山沢のコルに降りていく。ジャンダルムが終わったらかと思ったら今度は赤岳主峰群の到来であった。いやいや、お腹一杯に満喫させてくれる（本当は体がヒィ～、ヒィ～ものだった）。I峰の登りがこれまた急な登りで、ルンゼからクラストした雪壁を左上ぎみに登り岩塊の下の雪面を左側から巻き、III峰へ向かう。

III峰から先はIV、V峰を殆ど稜通しに進み、ブッシュの瘦せ尾根を辿り岳樺平に着いた。

先行していた古山さんが、昨夜、あのアンナブルナ遠征隊がビバークしたのか？大きなビバークサイトがあった。その中心で我々2人の到着を「早く来いよ」と感じてこちらを見て、手をふって招いている。古山さんと合流し、ビバークサイトを見てみるとブロックが奇麗に積んであってまるで、『おいちゃん達、ここでビバークしていきなさいよ、タダだよ。タダ』といっているようだった。

『どうします。ちょっと早いですが、ここでビバークしませんか？ 今からでは稜線へたどり着くかどうか？ それにビバークサイトがあるかどうかわかりませんしね。』

と古山さんが言ってきた。時間的には午後1時をまわりつつあった。

私は一瞬『そうですね、ここでビバークしますか』と言いそうになったが（そんな快適なサイトだった）、いや待てよ、こんなところでビバークしていたら明日につけを回してしまいそうなので、『いや、稜線上でビバークしているパーティもいるはずですよ、必ずビバークサイトはあります。がんばって稜線まで上がりましょうよ。明日の行動を考えれば、稜線に出た方が楽ですよ』と私の意見を通してビバークを断念してもらい、後ろ髪を引かれる思いで稜線へ向け急登を登り始めた。

結構大変かと思った登りだが、急登なだけに思った



初日の出をバックに…生井、古山、笹平

より早く2時間ちょっとで稜線にたどり着いた。稜線直下にの所にちょっと環境は悪いがビバークサイトがあった。が、日あたりの良い風の余りあたらない所を探そうと、稜線上を槍ヶ岳方面に笹平が偵察、反対方向へ古山さんが捜しに行く。私は稜線に出た時、斜め右下200～300m前方の窪地に2張りぐらいは張れそうなちょっと平らな所を見つけ、ビバークサイトだったらあそこで辺りかなと目星をつけていた。その目星をつけた所に古山さんがうろうろしていた。古山さんも同じ所に目星を着けていたのか？、やはり私が思っていた所で立ち止まり状態を見ていた。私が

『どうですか。そこはビバークサイトとしては良さそうに見えるけど、どうですか～！』

と叫んでみると、古山さんは手を振ってOKのサインを出してきた。

笹平を呼んで古山さんの所へ向かう。合流後ザックおろし今宵のねぐらの建設に3人で行なう。この時、笹平はブロック製作に黙々とまるで何かに取り付かれたように等間隔で雪を切り出しては、それを芸術品でも作っているようにブロックを積んでいた。まるで頭の中にあるイメージを表現するように。それは岡本太郎画伯が「芸術は爆発だ！」と叫んで作品を制作していたと同じように「ブロックは爆発だ！」と叫びながらブロックの形を整えていく笹平ブロックデザイナーの姿を、我々2人（古山、生井）は静かに見守っていたのであった。

豪華なテントサイトが建設され、今宵も快適な一夜を過ごせる。早速快適そうなテントに転がり込み、ほ

っと一息。全員テントに入ってお茶を飲みながらゆったりと、夕まずめの雰囲気を味わう。その後夕飯、午後のコーヒー、そして少々アルコールをいただきて、心地よいおねむの時間になった。

寝つきの早い私は、いつの間にか辺りは白いモヤに包まれていった。そしてモヤが晴れて見えてきたのは澄み切った青空だった（また、また夢の中）。

気がつくと、町の中心に一際巨大な大聖堂が見える。そう、ここはフィレンツェ。その大聖堂をまじかに望むウフィツィ美術館に来ていた。そして傍らには例の小悪魔娘の沙織がいた。

『いっちゃん、早く入ろうよ。私も絵、早く見たいよ』

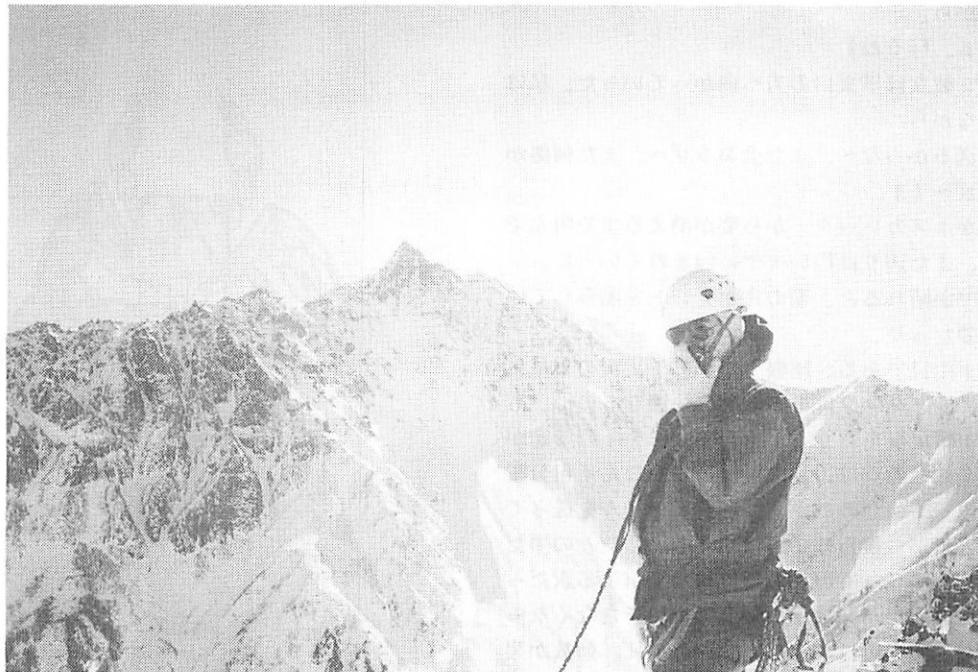
『ああ、行こう！』

と沙織の手を取り美術館に入った。

まず最初は、レオナルド・ダ・ヴィンチの受胎告知。ラファエロの聖母子等々。そしてここで一番充実しているサンドロ・ボッティチェリの部屋に入る。まずはボッティチェリ初期の代表作品「東方三博士の礼拝」（これは、バトロンのメディチ家の集団肖像画に仕立て上げたもの。そのメディチ家の力で輻輳と画壇に登場したのだった）。「ヴーナスの誕生」、そして彼の代表作というよりもルネッサンスを代表する作でもある「春（プリマヴェーラ）」等を見て回った。彼女も絵が好きで話が合う。絵画鑑賞にも疲れたので、外に出てカフェテラスで軽く食事を取り、ホテルに戻った。

夕暮れの道をホテルへ帰る道すがら広場の噴水の前で、その噴水を見つめながら彼女はボソリと、

『いっちゃん、ねえ、私とこのまま駆け落ちしない？』



槍ヶ岳をバックに交信？する古山

と私につぶやいてきた。私は、
『なに、言ってんの～。おまえの夢はどうなるの。そんな弱気になるなよ』

と余り本気にしてなかった。すると彼女は黙ったまま何か考えているようだったが、すぐに
『なんちゃって、ね。へへへ』と、おどけてみせた。

帰国して半年後、彼女が北海道へ帰るというので空港まで送って行った。空港の駐車場に駐車し、車から降りようとしたら彼女は私の手を押さえて
『ちょっと待ってえ！』。
と私が降りるのを止めた。そして
『いっちゃん、私がいいって言うまで、ちょっと目をつぶてってえ』
と、言いながら辺りを見まわしていた。
『んへん、どうして？？』
と言うと
『いいから早く、早くしなさい』と（命令口調で）言うので、ちょっと不安はあったのだが沙織（小悪魔娘）のいう通りにした。すると彼女は辺りに人気が無い事を確認すると私の首に手を回し、別れのキスをしたのだった。ホッ、しばかれるのかと思った。良かった。
空港のカウンターで搭乗手続きを終え彼女は、
『それじゃ、北海道に帰ったら本場のケガニ送るネ、食べるでしょう。楽しみにしていてね。あ、そうだ。私のアドレスは知ってるしょ、メール頂戴ね。私もメールするから』
『ああ、わかった。気をつけていけよ。風邪ひくなよ。歯磨けよ。浮氣すんなよ』
『まったく、な～に言ってんだか～？？』
と言いながら、
『それじゃ、行くね』
と、笑顔で彼女は搭乗口の方へ向かっていった。私は手を振りながら
『メール送るからな～。また会おうぜ～、また何処かで会おうぜ～！』
と、彼女がエスカレーターから姿が消えるまで叫んでいた。また辺りは白いモヤに包まれていった。
白いモヤが晴れると、朝の光がテントを照らしていく。また夢だった。

今日は下山日である。尾根上だから千丈沢の乗越まで多少のアップダウンはあるものの快適なものだ。もしかしたら中崎尾根を登ってくる高田パーティの予定が伸びて千丈沢の乗越辺りにいないかななんて自分勝手な事を思っていたのだが、彼らは1日は早く下山したとの事だった。同時期に登っていたので無線で交信する訳だったが、私の無線機が何故か故障して交信できなくなってしまった。出発にはちゃんと動いたのに、何故か突然私に対して反抗してきた。

千丈沢乗越から飛驒沢を脱兎のごとく降り、槍平小屋で一休みを取り、白出小屋からは右俣林道を快適に新穂高までおり、バスで松本まで戻り、松本から電車で信濃大町へ。そして信濃大町から私の車で帰途に就いた。（コースタイム記録なしです。あしからず）

今回の山行は、確かに硫黄尾根は長くて大変だったが、気分的には楽な山行だった。まだあと1日2日は続いても余裕な感じだった。パーティの力量があったからかも知れない。多分、「なんだ、硫黄尾根なんて思ったより楽勝ジャン。何時でもいいからまたかかってきなさい。硫黄尾根君！」てな思いが3人の気持ちであっただろう。

私個人としては、楽しい夢も見られて、まるで現実と夢が分からなくなる幻を見ていた様な経験（パーティル体験）だった。

もしかしたら、貴方もここに来ればこんな経験をするかも知れませんよ。ただし冬期積雪期だけですよ。何しろ彼女は北海道生まれだから、夏は苦手のはず…。

後日、部屋でくつろいでいると、宅急便が
『すみません。お届けものですよ。はんこ下さい』と、やってきた。はんこを片手に荷物を受け取って「中身は何かなあ」と見るとケガニと書いてあった。誰が送ってくれたのかなと送り主の欄を見て私は愕然とした。そこには北海道、帯広、「伏見沙織」と書いてあった。
あれは夢じゃなかったのか…………？？？。

(生井 記)



南アルプス・塩見岳

1999. 12. 31～2000. 1. 3

パーティ L本岡一統、渡辺聰子、吉田仁

初めての正月山行、初めての本格的冬山、初めての3千メートル峰と初ずくしの大変な山行だというのに、ボクは年末に風邪を惹いてしまいました。事の発端は、12/23日に行った八ヶ岳なんですがボクは、ちょっと風邪ぎみだったんです。「う～身体が重いー」と思いながらも、だましだまし大同心巻きを登り硫黄岳のてっぺんを、踏んで車に戻って来た時には、絶不調になっていました。下山してからのお楽しみ温泉にも入れずメシも食えずかなりヤバい状況になっていました。次の日、早速お医者さんに行き、仕事が終われば、真っ直ぐにお家に帰りおとなしくしていました。にもかかわらず一行に良くなりません。それどころか日々悪くなっている様です。そこでもう一度お医者さんに相談に行きました。

『先生、どうしてもお正月までに治したいんですけど』『あっそう、じやあ～点滴打とうか、カーと効く奴一本!』

というわけで、愛想の悪い看護婦につれられて点滴室に行きました。点滴室に入ると、棺桶に片足を突っ込んだような人たちが数人点滴を受けていました。この人はたちは、無事に年を越せるのでしょうか?そしてボクは、正月に重い荷物を持って冬山に登れるのでしょうか?真剣に心配になって来ました。30分程で点滴

は終わりベッドから起きるとだいぶ身体が楽になっていました。なかなかいい感じです。それにプラス、先生曰く世界最高水準のお薬をもらい何とか2000年の光が見えて來たのでした。

30日の夜、集合場所に集ると、本岡隊長も風邪ぎみとのこと。病気とは、無縁と思われる渡辺隊員までも「扁桃腺、腫らっしゃいました～」と言っていた。(あなた、それだけ食欲が有ればだいじょうぶだよ。)なんだかボク、気が楽になりました。

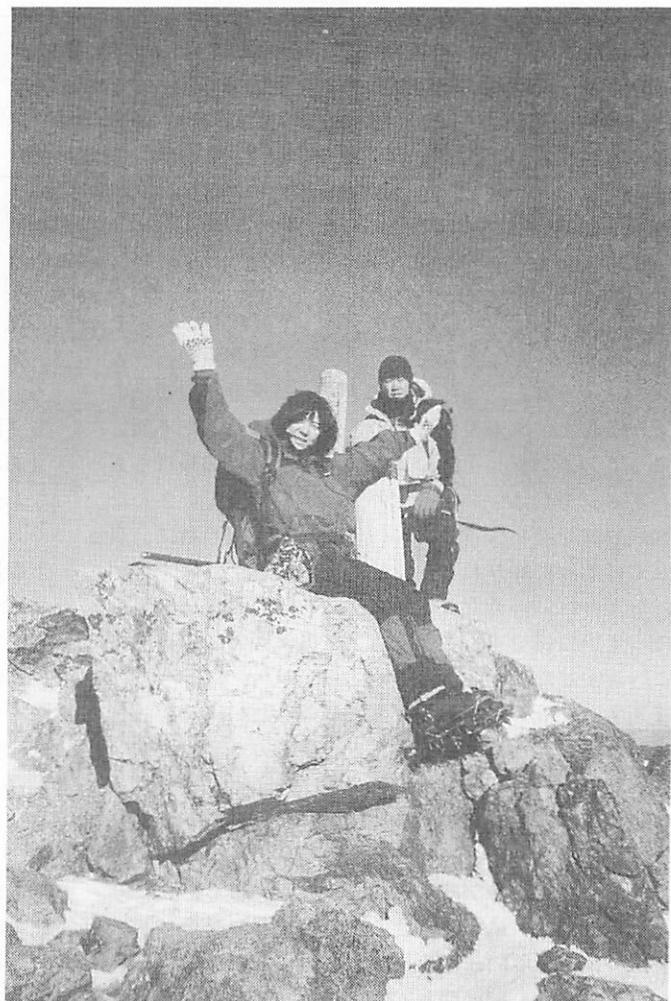
31日早朝、具装を振り分け、パッキングをし直して塩川小屋を出発。思ったよりザックは軽い。(25kgぐらいだろうか。)今回一番心配したのは、山伏小屋までの登り。重い荷物を背負ってひたすら急登の連続、はたして小屋まで、たどり着けるだろうかと不安だったけど、点滴と7種類の薬のおかげだろうか、意外に身体は軽い。それどころか、高度をかせぐ程身体が軽くなっていく感じだ。5時間少々で山伏小屋に到着、まあまあのペースでしょう。早速小屋のわきを整地してベースを設営。明日は、ヘッ電で出発なので7時過ぎに就寝、下界では、考えられないことだ。夜中、花火の音で目を覚ました。時計を見るとちょうど0:00を過ぎたところだった。本岡隊長も目を覚ましたようである。おもむろにラジオのスイッチを入れ、下



塩見岳を望む…渡辺、吉田

界で何か面白いことが起こってはいないかと、ニュースを聞いているようである。しばらく聞きいっているようであったが、ちょっと残念そうにスイッチを切った。何事もなく2000年を迎えたようだ。

2000年1月1日、ヘッ電をつけて5時ベースを出発。頂上往復なのでザックは、ベランコ、世界最高水準の薬のおかげで身体も軽い、空は、一面の星空、風もなし、最高の条件だ。本谷山までは、尾根道歩き、権右エ門山南面の巻道に入る。この辺は積雪が多いが、トレースは、バッタリ着いているので楽に進める。塩見小屋を過ぎると、いよいよ天狗岩への急斜面に入る。クランポンを付けての山行は、2回目だが特別不安になるようなところもなく無事に塩見岳東峰の頂上に到着、風貌の割りには、意外に狭いです。ちょっと風はあるけど天気は快晴、初の3千メートル峰からの大バノラマを満喫して下山にかかった。一日予備の日を作っていたので、順調に行けば何処かもう1つ登る予定だったけど渡辺隊員が、体調を崩してしまったため明日下山することにする。そうと決まれば、荷物を軽くしなければならない。残っている食料を片っ端から喰うことにする。まず最初に今回の山行のメインディッシュのキムチ鍋の調理にかかる。が！食当は肉を忘れたと言う。本来ならば、ブッとはれて雪の中にうめられても仕方がない重罪だが、その食当は、すでにシュラフの中。今回は勘弁してやるしかないだろう。それにもとも、キムチと野菜だけでは水っぽくて物足りない。どうしたものかと顔を悩ませていると、さすが用意周到の本団隊長である、立派な肉棒を持って得おられた。そいつを輪切りにして鍋に挿入する。これがバッタリとはまり本来のブタ肉に負けじと劣らぬいい味を出してくれた。大の辛党であるわれ我は、これにある闇のルートから仕入れた、濃縮トウガラシを入れて食べようとしたのだが、こいつは、かなり辛いらしい、一応入れる前に紙めてみるとその辛さたるや尋常ではない。これは、完全に調味料の棒をこえている。この分量は、ある意味、武器と言っても過言ではあるまい。さすがにこのリーサルウェポンを鍋に投入するのは自粛した。そのあとも残っている食料を片っ端から喰いあさり我々の身体はウンコ製造機と化したのだった。



塩見岳頂上にて…渡辺、吉田

1月2月3日

塩見小屋(7:40) - 三伏峠(12:52)

1月1日

三伏峠(4:50) - 一本谷山(5:54) - 塩見岳(9:18) - 三伏峠(14:37)

1月2日

三伏峠(7:53) - 塩見小屋(11:09)

(吉田 記)



怪しい中高年登山隊八ヶ岳を登る

1999. 12. 31～2000. 1. 1

パーティ 木村一、鯉河仁志、名雪博二、水島幸夫

毎年元旦に下山しなければならない私にとって、八ヶ岳は手頃な対象の山として貴重な存在です。今年は茨城から鯉河氏も同行する事になったので車で入山する事になりました。

今年の中央高速はどこもかしこも警察機動隊の車が目に付く。途中のサービスエリアで得た情報では、暴走族の初日の出暴走を阻止する為に各県警の機動隊が動員され、それも大晦日の前日12／30からの取締り開始で完全封鎖を目指して包囲網を敷いているとのこと。

八ヶ岳へ車で来るのは十数年振りなので、私も相棒の鯉河氏も美濃戸口への道路を忘れている様子。仕方なく高速の出口に待機していた機動隊の方に美濃戸口への道路を教わった『お巡りさんありがとうございました』。

美濃戸口には正月を八ヶ岳で迎える登山者の車が沢山駐車してあるが、雪が異常に少ないので気になる。ふた昔前の若かりし頃、夜行列車で八ヶ岳登山口茅野駅に降り立ち、更にタクシーの相乗りで美濃戸口まで入り、ここから暗い夜道をヘッドライトを頼りに赤岳鉱泉まで登り、赤岳西壁&横岳西壁をよじ登り、その日のうちに帰京した頃の記憶が蘇ってきました。当時は冬の八ヶ岳の夜行日帰り山行でトレーニングを積み重ね、冬の一の倉沢・冬の滝谷に挑んだものです。

今回は車で入れる所まで入り小松山荘の駐車場に車を止めて朝まで仮眠を取る事にした。まだ夜が明けきらない朝の5時前に起床して手早く朝食を摂り、5時半には吐く息も凍り付く冬山へ第一歩を進めていった。同行の鯉河氏は冬山へ登るのは久し振りなのであまり調子が良くない様子だ。前日にベースキャンプまで入っている水島名誉会長・名雪登攀隊長と朝の7時半に赤岳鉱泉で待ち合っていたので、鯉河氏には悪いが先行させて頂き約束の7時半に赤岳鉱泉に到着。

テントの入り口に日章旗を掲げているテントは1張しかなく、水島氏・名雪氏のテントはすぐに辿り着く事が出来た。ACC-J大本營のテントに入り、温かい飲物を飲みながら今日の行動を相談する。

『赤岳主稜にしようよ』『朝早く下から登っているので短いルートに行こうよ』とか話している中で、赤岳南峰リッジの登攀に決定した。そうと決まれてもルートは短いのでゆっくり準備して出かける事にした。

中山乗越及び行者小屋からの登りは怪しい中高年登山隊には厳しい登りだ。最年長の水島氏は文三郎道の登りで『俺はここまでいいよ。ここから降りる』と言い出す始末。ここで敗退しては中高年登山隊の空中分裂は必死。どうせ先を急ぐ必要はないので小休止を繰り返しながら、

やっとの思いで南峰リッジと同高度まで登り、左にトラバースして南峰リッジ側面で登攀準備をして、名雪登攀隊長がトップで11時登攀開始。『赤岳を登るには文三郎道を登るより南峰リッジを登ったほうが楽だよ』と名雪登攀隊長。『足だけではなく手も使えるし、ピッチの区切りでは休めるからね』と最年長の水島氏。実際に南峰リッジを登つてみるとそれが実感できる。どこでも登れそうな稜を忠実に登り、左を見ると赤岳主稜を登っているパーティがすぐ近くにいる。トップを登る名雪登攀隊長は上部の凹角状を気持良く登っているが今年は雪が少なく登攀は楽だ。しかし場所によっては雪壁になっていた方が登り易い所もある。凹角状の壁を抜けて上部を見ると、赤岳頂上から我々パーティーの写真を撮っているらしく、高級カメラが2～3台こちらを狙っているのが判る。

南峰リッジの登攀を終了して文三郎道の上部に出て登攀具の整理をし、ザイルを巻取っていると上部から変なオッサンが（我々も変なオッサンだが）写真を撮らせてくれと言ってきた。あげくの果てに等間隔に並んでボーズを取ってくれとのたまうではないか。これは山岳雑誌の表紙にでも載るかなと思いながらモデルになったが、もし、【山と渓谷】又は【岳人】で我々の勇姿を見かけた方はご一報ください。

赤岳頂上は1999年最後の日なので明日のミレニアム初日の出を見ようと多くの登山者が登っていた。我々は美味しいシャブシャブ＆寄鍋が待っているので早々に下山。地蔵尾根は雪が少なく上部は岩が露出しており気が抜けない。

テント帰着16：00。その晩はテント内で大宴会を催し、その後赤岳鉱泉での大ビンゴ大会に繰り出して賞品をゲットして、更にテントで夜の更けるにも忘れて1900年代最後の夜を楽しんだ。こうして怪しい中高年登山隊はミレニアムを無事に迎える事が出来ました。メデタシ。メデタシ。

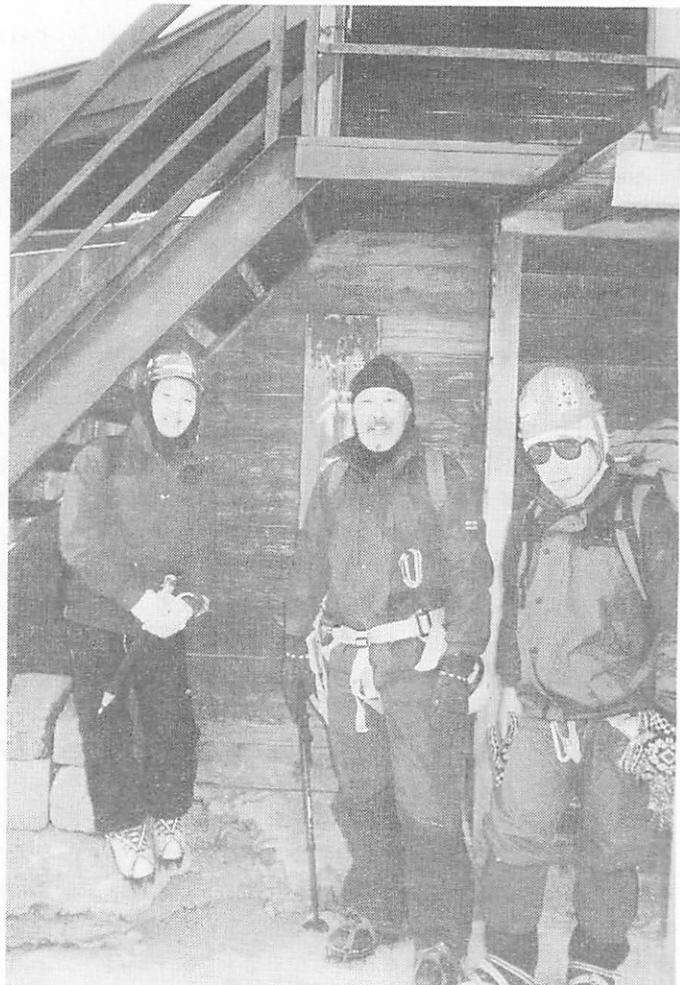
(木村 記)

八ヶ岳石尊稜

2000. 1. 1

パーティ L名雪博二、木村一

ミレニアム元年最初の登攀は八ヶ岳横岳西壁石尊稜に前夜テントの中で決定した。昨晩は1999年最後の夜の宴を夜半まで堪能したが、今日下山予定なので早朝に起床し手早く朝食を取り、6時にはテントを後にした。パートナーの名雪氏は朝から腹の調子が良くない様子だ。石尊稜の取り付き直下で下部岩壁を見上げると、岩壁には雪が全然ついておらず黒々としている。三叉峰ルンゼ側から小さい氷壁を越えて、更に急な雪壁を登り右尊稜の取り付きまで登ったが、名雪氏が今日2回目のキジ撃ち。暫くして登ってきたが、『下痢便太郎』との事。これが後々壮絶な登攀の幕開けになるとは、この時点では誰も予測が出来なかった。石尊稜取付きで登攀準備を整え名雪氏トップで下部岩壁に取付いたが、先程キジを撃った為か快調にザイルが伸びていく。上部の雪壁に入った所でピッチを区切り、ここでトップを交代して灌木の生えた雪壁を直上したが、下から名雪氏が『安定した所でSTOP』と大声で怒鳴っている。約40m右上し稜上の安定した所でピッチを区切り名雪氏を確保したが、駆けるようにして登ってくるとザイル&ハーネス&外して投げ捨て、更にオーバーズポンを下ろすが間に合わず恐ろしい事になってしまった。あーこれ以上描写する事は出きない!!。ミレニアム登攀が黄金に輝く登攀に変った瞬間である。その間私はパートナーが苦闘しているのに手助けは出来ず証拠写真を撮るのみであった。気が付くと名雪氏が黄金の下着を破り捨てようとしているがなかなか破る事が出来ず難儀している。2人でピッケルとアイスハンマーを使い、男の下着を破り取っている姿を他のパーティが見たら何と思うか?。先行&後続パーティが居なくて幸運でした。私も登攀中にキジを撃った経験が谷川岳一の倉沢の登攀中に2回あります。1回目は衝立岩ダイレクトカンテの登攀中に取り付き付近でザイルで確保されながらのキジ撃ち。2回目は鳥帽子奥壁中央カンテルート登攀中に4層半テラスでザイルを結んだままキジを撃った事があります。なに?『キジの処分はどうしたって?』。方法は秘密ですが後続パーティに迷惑が及ばないようにキチンと処分しました。痕跡を残さないようにするのが山でのマナーですよ。話を石尊稜に戻しますが、調子が悪そうな名



行者小屋前での名雪、水島、木村

雪氏に下降を提案すると『ゆっくり登ればそのうち回復するのでこのまま登ろう』との事。今年は雪が少ないのでここからはノーザイルで登る事にし、ザイルを肩に担ぎコンテニアスで上部の雪稜を登り、写真を撮りながらゆっくりした歩みで上部岩壁の下に到着。先行パーティが登攀中なので、陽があたる場所を見つけて小休止。先程計らずも中身を出してスツキリした名雪氏は調子が戻った様子でジョークを連発しながら上部岩壁をトップで登り出した。上部岩壁はホールド&スタンスが豊富で気持ち良い登攀が出来る所だ。上部でトップを交代してそのまま石尊峰に出て風の当たらない場所で名雪氏を確保。名雪氏は軍手を手袋として使用しているので『寒い!!寒い!!』を連発しながら登ってきた。東面の風の当たらない所でザイルを巻き、大休止をして下降開始。登りにかかるとヨレヨレの2人だが、下りは気が抜けない事

は体に染み付いているので気合いが入り、地蔵尾根を慎重に下降し赤岳鉱泉のテント場着14:00。明日は天候悪化が明白なので、名雪氏・水島氏も下山するとの事。そうと決まれば行動は素早く、テントを撤収

して美濃戸口まで一目散に下山。こうして黄金の、ミレニアム登攀は無事に終了した。

(木村 記)

赤岳東稜

2000. 2. 5~6

パーティ L本岡一統、吉田仁、笹平孝

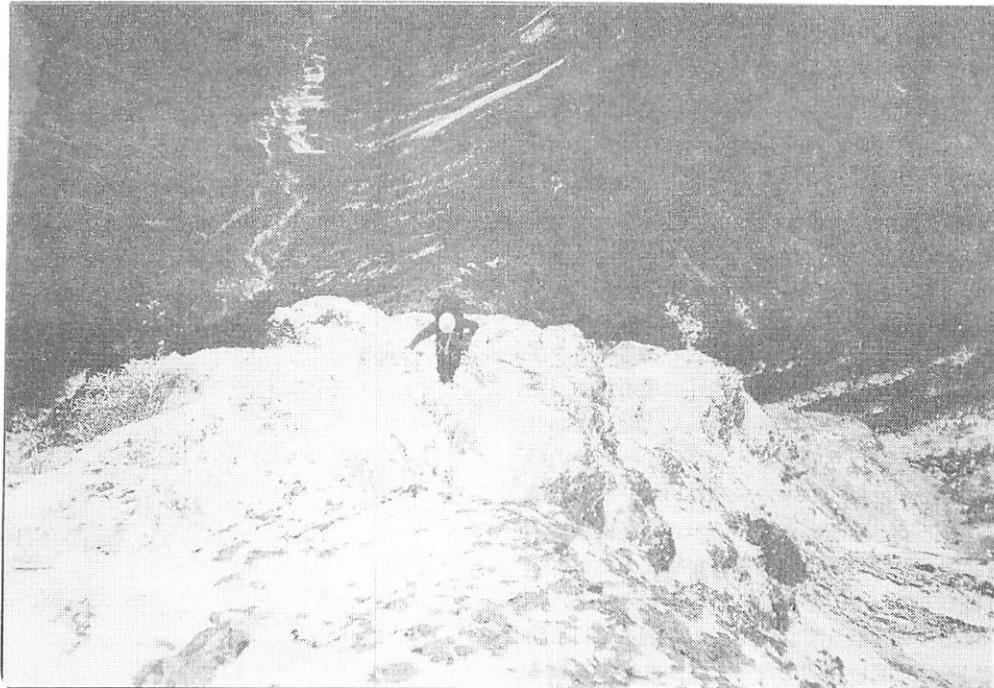
スキー場入り口の手前に車を止めた。ここから林道を1時間ほど行くと、歩きにくい沢歩きになった。踏み跡が残っていたので、ほとんどラッセルをしないで沢を登っていった。そのうち稜に取り付いて、踏み跡を辿りながら急斜面を登って行くと、いきなり林道に出てしまった。一瞬、頭の中が真っ白になって、良くルートを見ると、ここは県界尾根だった。そう言えば、本岡さんが地図を見ておかしいなあと言っていた。とりあえず、急な斜面をヤブコギをして沢に降りた。東稜に取り付くと、まもなく樹林帯を抜けて、第一岩峰下のルンゼに出た。凍った草付きを、ピッケルを使って慎重に登る。雪稜に出ると、やがて第二岩峰に着く。基部を左にトラバースして行くと草付きの急斜面になる。ここから先は、ロープを出して行く。岩が草や雪に隠れているので、たまにバイルが岩に当たって火花が出た。上部は木登りになって、4.5m延ばした。次に這松を抜けると雪稜に出る。ここからは、赤岳頂上小屋が良く見える。すぐにまた這松帯になり、2ピッ

チほどで童頭蜂に出た。ここからどっちに降りるか少し悩んだが、行者小屋に降りた。

翌日、ジョウゴ沢でアイスクライミングを1時間ほど遊んでから下山した。そして、バス、電車、タクシーを乗り継いで駐車場に戻った。

県営清里スキー場(7:00) — 赤岳童頭峰(15:55) — 行者小屋(16:59)

(笹平 記)



赤岳東稜を登る吉田

茨城岳連主催雪上訓練

2000・2・5～6

渡辺聰子

年末に行われた会の雪訓で雪上での歩き方、ピッケルの使い方から始まってピーコンを使った搜索法、ビレイの方法その他を一通り教わったが、きちんと覚えられたかどうかちょっと不安だったこと、雪洞作りという指導項目があつたこと、くろがね小屋に温泉があることの理由で茨城岳連主催の雪上訓練に申し込んだ。他山の会に所属している友人達も参加するということだったので皆で一台に乗り合わせて4日のうちにつくばを出発した。

翌朝集合場所に行ってみると受講生は20人くらいで話に聞いていたよりも少なかった。講師陣リッチな雪訓になるとと思うとちょっとうれしい。班編成を見ると同行者のうち私を含め女3人が同じ班だったのでかなりうれしい。開講式の後スキー場からくろがね小屋へ向けて出発した。途中の斜面で輪かん歩行の練習をする。輪かんを着けて登ったり降ったり、3人でいかに美しい足跡を雪面に残すかに気合いをいれる。夢中になっていると『もう終わり～、小屋に向かいますよ。』

との声がかかる。見ると他の人たちは既に輪かんをはずして出発する準備をしていた。まずい！と急いでみんながいるところに戻り、輪かんをはずして再び出発し、やがてくろがね小屋に到着。しっかりしたトレースがあるのだけれど、やはり斜面をトラバースしたときは緊張した。時間が早いため小屋には入れてもらえず、外で休憩をとった後ちょっと登ったところでつば足での登降、アイゼンを着けての登降の練習をした。登るのはまあよしとして、やはり下りに問題ありのようだ。ひとしきり練習するがどうもいまいちである。次は滑落停止の練習である。年末の会の雪訓のときは雪不足のせいもあって、斜面をみんなで作り滑ろうと思っても滑らないという状況のところで練習したので、ほんとに止まるかどうか不安をもっていた。今回はそれなりの斜面で練習できると思っていたが、やはりみんなで滑り台を作りふかふかの雪のところで練習したため、滑ったときに止まるかどうかの確認は出来ずじまいだった。閉講式のときにもう少し登ったところに滑落停止の練習に絶好の場所があったのに、という話を聞いて非常に残念だった。ひととおり練習をしてみんなそれなりの格好になり、ころあいの時間にもなったので小屋に戻り中で一息ついた。さあいよいよ雪洞作りである。くろがね小屋のわきに冬山基礎講習の受講者と中高年登山講習の受講者が集まつたが、スコップを準備していったのは私たちの2本のみであった。そこで、小屋から2本借りて計4本で雪を掘る。日も陰り、風も吹いていて寒いのでここぞとばかりに雪を掘る。掘るべし！掘るべし！掘るべし！とがんばるが全然先

へ進まない。隣に掘っていたもう一つの方は見る見るうちに出来ていく。交代してみんながみている方にいくと、『いや～、がんばるねー。』

とは言ってもらえるのだがお褒めの言葉は皆無である。

『少しぐらい褒めてくれたっていいじゃないよねー。』と友人につぶやくと

『だって下手だもん。』

あうっ・・・。

どうやら雪洞つくりの練習（復習）も必要なようだ。そういうするうちにかなり立派な雪洞が出来てみんな満足げに小屋へ戻った。部屋割りと荷物の整理の後はさあお風呂、お風呂。乳白色の温泉はとっても気持ちよかった。夕飯と座学の後にもう一度温泉につかって就寝。久しぶりの小屋泊まりだったせいか、なかなか寝付けなかった（ほんとうです）。

明けて6日。朝食後、私たちはロープ技術をマスターすべく、中高年登山講習の方々は安達太良山山頂を踏むべく出発した。頂上大好きな私としてはちょっとうらやましい。2人組になって1人が「滑落～」といって斜面を走り1人が止めるということを繰り返す。この練習で実際に止められるようになったかはまだ疑問である。実際にコンテで歩く機会が多いかどうか講師に聞いてみると、コンテで歩くことは非常に希で、実際に確保が必要なところではスタッカートでの行動になるとの事だった。良い時間になったので練習を切り上げて昨日と同じ道を戻って最初の集合場所へ戻り閉講式を行って解散となつた。

（渡辺 記）

中央アルプス

～空木は遠い・わたなべおおへこみの記録～

2000. 2. 11~13

パーティ L本団一統、渡辺聰子

中央アルプスの縦走は本団さんにとっては数年前のリベンジらしい（詳しくはR&V23号を参照の事）。わたしにとっては初めての中央アルプスだ。当初の予定は千畳敷～極楽平～檜尾岳～空木岳～池山尾根だったが、地図をながめていたら宝剣岳にも登りたくなってきた。そこで本団さんにおうかがいをたててみると、OKの返事がもらえ、わくわくしていた。

『連休の3日間、本州は高気圧におおわれ絶好の行楽日和になるでしょう。』という天気予報の声に気をよくし、土浦を出発。渋滞の首都高速を抜け駒ヶ根の駐車場に車を止め、空に星が出ているのを確認して就寝。翌朝、バスに乗ってしらび平に向かうと、さっきまでの晴天はどこへやらなんだか雲がたちこめてきた。しらび平でロープウェイに乗り換えて千畳敷まで高度があがるに従って雪がちらつき始め、やがて……吹雪いてるじゃないのよ～。視界もきかず強い風（と私は感じた）の吹く中歩き出す。出だしから泣きそう。本団さんの後について歩くが、足をおくたびに雪に埋まってばかりで全然進まない。なんであたしづっかり埋まるの！？10mも進まないうちに気持ちはずっかりへこんで、「帰りましょう。」というセリフが喉ま

ででかかっていた。それでもなんとか歩いていると、後ろから4人パーティーが追いついてきて「いや～、6人でラッセルすればかなり楽ですねー。」とリーダーらしい方に言われるが、（ごめんなさい、あたしは何の役にもたちません。）声にならない。疲労困憊になりながらもなんとか極楽平についた。ここから宝剣岳を往復するはずだったが、とんでもない、そんな余裕は全くない。さらに強風が吹き荒れる（と私は感じた）中、檜尾岳へ向けて出発した。歩きだしてまもなくだった。どてっ（あ、転んじゃった。こんな稜線で転んだらえらいことになる、気をつけなきゃ）。起きあがって歩き出す。どてっ（あっれー？？）。また歩き出すとまたまたどてっ（ちょっとまって、なんかおかしい・・・あたしってばどうしちゃったの？）。

『どうしたんだ？大丈夫か？』『大丈夫です。』『見えるか？』『見えてます。』このとき私の眼鏡は真っ白で本団さんは（なんでこの眼鏡で見えるんだ？）と思ったそうだ。確かに・・・。眼鏡をはずして歩き出す。0.01ない裸眼視力だがずっとましだった。すっかり気持ちも体もへこんでいたが、それでも足を進めて濁沢大峰を通過したところで今度はルートを見失つ

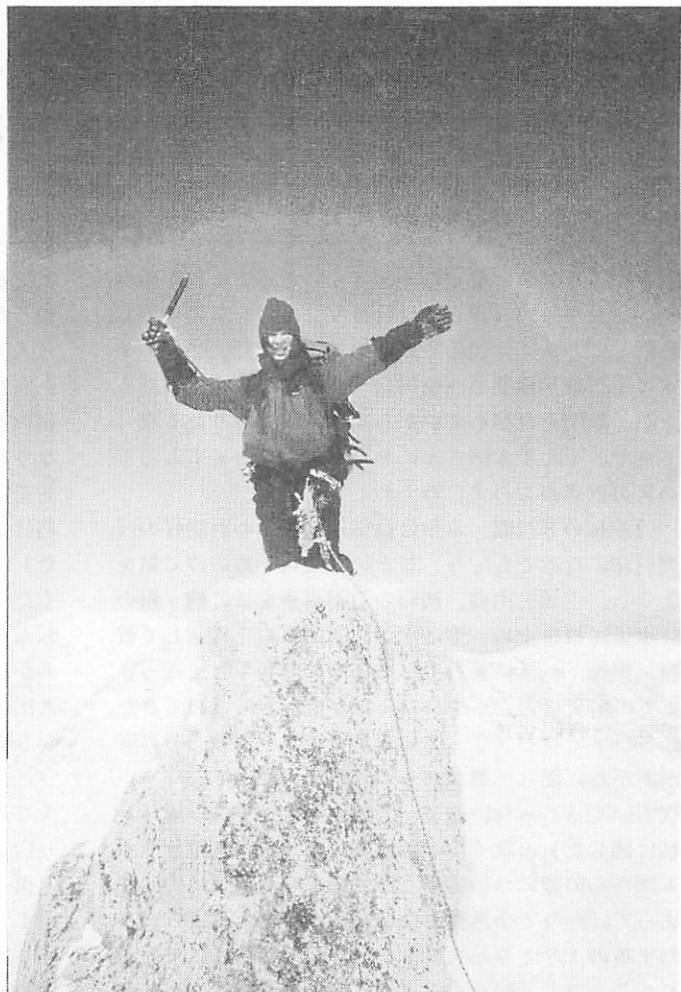


快適なビバークサイト…渡辺

てしまった。本団さんがザックをおいてルートの確認に行ったのだが、本団さんが戻ってくるまでの間の心細さったらなかった。もし本団さんが戻ってこなかったら、ということが頭の中をぐるぐるとかけまわり、気持ちはすでに遭難だ（今思えば笑っちゃうけど）。やがて本団さんが戻ってきて方向は間違ってはいないようだが何かおかしいと言う。時間的にいってもこれ以上は行動しないほうがいいだろうということでここでビバークすることになった。整地してテントをはって一息つくが、へこんだ気持ちはなかなか回復しなく、吹き付ける風がとてもおそろしく感じた。今日の予定地である檜尾岳までたどりつけなかつことと、雪が大分降ってしまったのでラッセルが厳しくなり予定日に下山できるかどうかわからないなどの理由で明日は引き返しきれは宝剣、木曽駒をのぼろうということになった。

翌朝、私たちは濁沢大峰から檜尾岳への稜線よりも右側の支尾根に入り込んでいたことがわかった。濁沢大峰まで登り返し、昨日来たルートを歩く。昨日とはうってかわった天気のなか南アルプス、北アルプスの山々が一望でき、途中、山座同定をしたり、前回来たときの話を教えてもらひながらゆっくりと極楽平まで戻ってきた。極楽平から宝剣岳の稜線にはザイルで強固に岩にくくりつけられているテントがあり、それは昨日の強風をうかがわせるものだった。宝剣岳の登りのときに『ロープ出さなくとも大丈夫かい？』と聞かれたが、まよわず出してもらって3ピッチほどで宝剣岳の頂上を踏み、そのまま木曽側をトラバースするように1ピッチ下り、ロープをはずして宝剣山荘と天狗荘のある鞍部まで降りた。小屋は両方とも閉鎖されていたが天狗荘のわきにかなりいい幕営地ができていたためここで一泊することにする。かなり早い時間だったのでテントを張った後に「今からでも木曽駒往復は十分できるけど今日のうちにいくかい？」と言われるが「明日がいいです。明日にしましょう。」と答え、早々にテントシューズにはきかえ、テントにもぐり込む（なんて根性無しなんでしょう）。この晩はどらまでいっくな話partⅡや山での思い出話、本団さん得意分野の話などを沢山していただいた。

明けて三日目、本日も快晴。朝食の後木曽駒の頂上を踏んでくる。テントを撤収し千畳敷ロープウェイ駅へむけて出発。以前はこの鞍部からまっすぐにホテル千畳敷のところへ降りることが出来たそうだが、雪崩で数人が亡くなったことがあるとかで通行禁止となっ



宝剣岳頂上にて…渡辺

ていて、今は伊那前岳の方へ登ってから千畳敷へ降りなければならないそうだ。上でロープを出し私がさる、本団さんが猿回しとなって降りる。腰が引けないように、引けないようにと歩いていると「だいぶまともな格好になってきた」とお褒めの言葉を頂戴した。建物のところに着いたのはロープウェイ出発2分前！乗り場までダッシュし、なんとか間にあう。しらび平から駒ヶ根へ向かうバスからは行くはずだった空木岳が見えた。自分の体力のなさ、根性のなさ、あまりのふがいなさに唇をかみしめて中央アルプスを後にした。

絶対また来よう、そして次こそ空木の頂上を踏んでやる！！。

2月11日

千畳敷(9:41) — 稜線(10:49) — ビバーク地(15:30)

2月12日

ビバーク地(7:56) — 宝剣岳(12:26)

2月13日

宝剣山荘(7:09) — 木曽駒ヶ岳(7:52) — 宝剣山荘(8:51)

(渡辺 記)

谷川岳・一ノ倉沢南稜

2000. 3. 4~5

パーティ L 古山正文、生井一男、笹平孝

今回の南稜は、2回目の挑戦になる。前回の12月に入った時は、天候が悪くて取り付きまでだった。立体駐車場に車をとめて、1時間ほど仮眠してから出発した。

一ノ倉沢出合に着くと、本谷を降りてくるヘッドランプが見えた。まだ大きな雪崩は出でていなく、コップスラブ側からデブリが出ていた。テールリッジまで来ると、気が楽になる。テールリッジの中間付近には、大きなシュルンドが開いていた。途中で後続のパーティが追いついて来たので、どこを登るのか聞いてみると、中央稜だったのでほっとした。中央カンテまでトレースはあったが、その先は見当たらなかった。鳥帽子スラブの所は大きく切れていて、ここからロープを出した。1ピッチトラバースをして、雪稜を2ピッチ登るとチムニーの手前まで来れた。

まずは、1ピッチ目を古山さんがトップで行く。ここからチムニーまでのスラブは雪がとても不安定で、雪を崩しながら進んでいく。チムニーの中も予想以上に難しかった。

2ピッチ目は、3級プラスのルートだけあってハーケンも少なかった。雪を手の届く範囲で全て落として、ホールドやハーケンを探した。ろくにランナーが取れない状況で、アイゼンの爪先1本で立ち込む時は、全

神経を集中して冷や汗が出るほど大変だった。やがて上に抜けると、ビレー点は完全に雪で埋まっていたので、少し先にあるブッシュを支点にした。

3ピッチ目は、雪壁を1ピッチ行き、岩壁を回り込む。

4ピッチ目は、ハーケンがあまり見つからないので、岩にシューリングを掛けて行く。馬ノ背リッジに出た所にあるビレー点を行き過ぎてしまったので、10mほど先の支点でビレーをした。

5ピッチ目のクラックは、ボルトやハーケンの穴にビッケルを差し込んで無理やり登る。やっと最後のピッチになったと思うと、気が緩んだせいか急に疲れが出てきた。最後のピッチは、古山さんにトップを行ってもらってほっとした。

上に抜けてからは、まず1ピッチ行き、暗くなってきたのでヘッドランプを点けた。次に、50mロープを繋いで100mにして、クラストした雪壁を2ピッチで尾根に出た。ここでツェルトを張ってビバークをした。しだいに風が強くなり本格的に吹雪き始めた。シュラフカバーだけだったので、寒くてほとんど寝ることが出来なかった。

翌日は、朝から吹雪で、視界も悪かった。5ルンゼの頭は、左側を行った。はじめの10mが悪かった。



5ルンゼの頭を過ぎると、ただひたすら稜線を目指して登り続ける。国境稜線に出ると凄まじい風が吹き付けていた。かすかに残っている踏み後を頼りに肩の小屋まで行き、休憩した。下りは、ロープウェイを利用して一気に降りた。

3/4 駐車場(3:20) — 取り付き(7:30) — ビバーク(20:30)

3/5 ビバーク(7:20) — 稜線(10:30) — 小屋(12:00)
— 駐車場(15:20)

(笛平 記)

八ヶ岳・小同心クラック ～核心は大同心稜？～

2000.3.18

パーティ L本岡一統、渡辺聰子

八ヶ岳に行く事になった。年が明けてからこっち、へこんでばかりの山行続きで「もしかして冬山ってばあたしが考えていたほど楽しくないのかもしれない。」と思いつめた今日この頃である。本岡さんが土曜日を休みにして3連休としてくれたので、本岡さんと私が先発隊として金曜日の夜に出発した。八ヶ岳ならば精神的遭難はしなくてすむにちがいない。渋滞に捕まって動かない車中で登りたいルートを申告する。「赤岳主稜と小同心クラックは登りたいです。」（あたくし、雪稜登攀だけでなく岩登りもしたくてよ）「阿弥陀岳にも行きたいです。」（あたくし、横岳、赤岳、阿弥陀岳のピークを制覇したくてよ。）

「この前の集会で吉田さんと『赤岳主稜ははずせないよね。』と話したので赤岳は吉田さんと一緒に登りたいでーす。」（あたくし、後でうらまれたくはなくてよ）とってもわがままなわたしである。「じゃあ、大同心稜にトレースがあり、かつ小同心の岩の状態が悪くなれば初日に小同心クラック、2日目に赤岳主稜。だけど大同心稜にトレースがなかったら初日に赤岳主稜だな。」とってもやさしい本岡さんである。ようやく着いた美濃戸では静寂の中に冴え渡る月が印象的だった。

翌朝赤岳鉱泉に向けて出発。途中見上げると誰かが小同心クラックを登ったらしく、雪で真っ白な小同心岩峰に黒く1本線が入っているのが見えた。小同心を登れそうだという本岡さんの言葉に心は躍る。赤岳鉱泉に幕営した後、大同心稜にトレースがあることを念しながら出発。同心沢との分岐に来てみると、あるある、ご立派なバケツが！（おほほほ、まさにあたくしの思うままだわ）年末に来たときとは異なり雪はかなり深いようだ。前回の教訓を活かすべく少しゆっくりめのベースでバケツをたどる（あらっ？あたくしへばなかなかブラボ



小同心クラックを登る渡辺

ーじゃないかしら）。「こんなものでしたっけ？もっとものすごい急登だったような気がするんですけど。」「まだまだ！これからだよっ！」はい、その通りです・・・。前回と同じ所よりちょっと手前で小休止。すると後ろから3人のパーティーが現れ、聞いてみると私達と同じく小同心クラックを登ることだった。私たちが再び登り始めると少し進んだところでさっき

のパーティーがアイゼンをつけていた。これを見た本岡さんは絶対先に取り付いてやる！と心に誓ったそうで「どれ、俺が前を歩くよ。」と言って私の前に出たとたんに、がしがしと登っていった。そんなことを考えていたとは全く知らず、かつ前回の教訓が全く活かされていない私には本岡さんの後についていくことはとうていできなかった（あらっ？あたくしってば今回もへこむのかしら）。そんな本岡さんの様子で、後のパーティーは私を抜いても先に取り付くことはできないと見たらしく私を追い越すとはしなかった。ぜいぜいはあはあ言いながらやっと本岡さんの待つ大同心の基部に着く。ここにはバケツを作ってくれたありがたい2人組がいて、大同心南稜を登るべく準備をしていた。ここからちょっと下ってトラバース、登り返して小同心クラックの取り付きにようやく到着。赤岳鉱泉を出発するときに「岩の状態が悪くなればリードしてもいいかもな。」と言われていたのだが思ったより状態がよくないとのことで私はセカンド。1ピッチ目、私が取り付けでビレーしている時、「前に大同心を登りに来たときに、先行パーティーのセカンドが止まってセミになっちゃってさー、2時間くらい待たされたんだよねー。」と言う声が耳に入ってきた（あらっ？もしかしてあたくしにいってるのかしら）。「あ、もしかしたら私もそんな風になるかもしれません。もしなったらごめんなさい。」と笑顔で言っておく（あたくし、意地でもそんなことしなくてよっ！）。そうこうするうちにビレー解除の声が、そして思い切って登つてこいという声で登り出す。思えばアイゼンと手袋をつけての岩登りは御岩山で2ヵ月前に一度練習したっきり

である。やはり雪がついていると勝手がちがうものだ。下から見られている手前のたくた登る訳にもいかないし、ましてやテンションなんて絶対かける訳にはいかない。フェースを登り、チムニーになったところで念をいれ毛の手袋を外してインナー手袋で登った。そのせいで1ピッチ終わったところで指先が痛くなる（あたくしってばなんてバカなんでしょう。もう絶対しなくてよ）。指先を暖めたあとで2ピッチ目、体がチムニーの中に入り込まないように注意しながら登る（まあ、毛の手袋はめてても全然大丈夫じゃなくて）。2ピッチ目を登り切ると「はいお疲れさま。後はあそこの小同心の頭まで行き、横岳頂上に行って終わりだよ。」と言われる。最終ピッチでは本岡さんが横岳山頂の道標をビレーの支点にして迎えてくれた。かあっこいいー！わたしもいつかやるぞー！横岳山頂は風もなく、空は青く澄み、気分最高である。ひとしきり景色と青空と太陽を満喫した後、大同心ルンゼから大同心稜を下り赤岳鉱泉にもどった。どうやら私にとっての本日の核心は大同心稜の登りだったようである。

次の日に本岡さんと吉田さんと3人で登った赤岳主稜も非常に快適で、文頭の考えはどこへやら「やっぱり冬山も楽しいわ。」と思いながら八ヶ岳を後にした。あー、あたしってば単純。

おまけ。

次の日に赤岳主稜の終了点に着いた後、北峰を越え赤岳の道標がある南峰へ向かう私を見て「俺は頂上にはあまり興味はないですからね。」と言っていたそうですが



小同心クラック登攀終了！。快心の微笑みの渡辺

吉田さん、地蔵尾根をくだる前に「あ、俺まだ頂上に行つてない。」とつぶやいて南峰へ行き、道標にタッチしてんまりして戻ってきたのをあたくし見逃さなくてよ。
まったく素直じゃないんだからっ。

美濃戸(6:29)ー赤岳鉱泉(8:40~9:18)ー小同心取り付き
(11:32~11:54)ー横岳頂上(13:52~14:23)

(渡辺 記)

赤岳主稜

2000.3.19

L本図一統、渡辺聰子、吉田仁

また八ヶ岳に来ちゃいました。この冬八ヶ岳に来るの、3回目なんですが、すべてバリエーション。しかも今回は、八ヶ岳バリエーションの王道?赤岳主稜に登るってわけですから、いやがうえにも力が入ってしまいます。はやる気持ちをおさえて常磐道をブッ飛ばすが、箱崎の手前から渋滞に、はまっちゃった。なんと八王子料金所まで歩伏前進を強いられてしまった。渋滞通過は、12時30分、早い時なら今頃は、美濃戸に着いちまう時間だ。明日は、4時起きなのに寝れるのか心配っす。なんだかんだで、2時に美濃戸到着。先発隊のデリカを林道わきに発見!その尻を舐めるようにデリカ2号をバックから注射?(駐車)した。アルコールもとらず、すぐに就寝。寝つきの悪い俺は、もぞもぞと3回程寝返りをうつと、朝になってしまった。ボヘしながら朝飯を流し込み、フラフラしながら出発の準備をして、ヨタヨタと先発隊の待つ鉱泉へとクラストした林道を歩き出した。2時間程で鉱泉に到着、意外にテントは少ない。すぐに先発隊のテントを発見することが出来た。ほかのパーテ

ィーは、すでに出発しているようだ。我々もパッキングをしなおして急いで出発する。それにしても文三郎の、登りは寝不足のオレにはきつかった。時おり襲ってくる耐え難い睡魔に何度も後ろにブッ倒れそうになりながら根性で足を上げていった。このまま行ったら、頂上まで行っちまうんじゃないの!つてぐらい登ったところでやっと取り付きに着いた。連休だし、天気もいいし、人気ルートということで、渋滞ゾロゾロかと思いきや先行は2パーティだけのようだ。ちょいと一服してからガチャを着けて、隊長が、トップで取付く。出だしは、CSのある凹角からだ。グングン、ロープが、のびてOK!コール。レディーファーストの習慣はないので、「そんじゃ、お先に!」と、オレが取り付く。意外にCSが、でっぱっていて、かぶりぎみなので強引にのっ越す。そのさきは、傾斜も落ちてトコトコと歩いていけるが、スリップ、ひっかけは、許されないので気は抜けない。3Pは、岩登り、ガバなので快適に登れるが、ビレイポイント意外は確なプロテクションが取れない、(トップで整っ



赤岳主稜を登る…吉田、渡辺

ている訳じゃないけど。)ほとんど気安め程度だ。フレンズがあつたら重宝したかも知れない。その先は、また傾斜の落ちた雪稜になり、凹角の岩稜を、つきすすむと赤岳頂上は目の前だ。

赤岳鉱泉(08:05) — 赤岳主稜取り付き(10:30) — 赤岳頂上(13:29) — 赤岳鉱泉(16:00)

(吉田 記)

八ヶ岳(赤岳)

2000. 3. 19

パーティ 木村一、鯉河仁志、菊池光夫、他3名

春の彼岸の頃になると梅の花も咲き、辺りは一面に春が駆け足で来ているのが分かる。今回は先発に本団、渡辺パーティで一日早く出発し、遅れて木村、鯉河、吉田、菊池で入山。集会での約束は赤岳鉱泉に7時着の計画。ファイトのある吉田君は先に行き、本団、渡辺パーティの赤岳主稜組とパートナーを組む。残りの3人は文三郎経由で赤岳へ、天気は曇りであったが行者小屋を越えた辺りから風が出てきた。前方左側には、主稜パーティの3人が見える。文三郎に入ると、菊池が連れ出す。温度による冷え込みはなかったが八ヶ岳特有の強風があり、稜線はつらい。頂上で待つこと20分で主稜パーティが登ってきて山頂で記念写真を撮り6人で地蔵尾根を下り、赤岳鉱泉へ・・・・・。

今回の楽しみであった本物の熊鍋パーティである。この熊肉は本団氏の友人より頂いた物である。味付けは既にすんでおり鍋に入れて温め直すだけであった。大粒の肉とダイコンが長時間煮込んだものと思われる程やわらかく食べやすかった。旨い。

今回の炊事班は吉田君も、渡辺さんもご飯の炊き方が上手で山のテントでの食事が以前より数段に良くなりとても喜ばしい限りである。

明日は天気次第ではあるが石尊稜か三叉峰ルンゼを計画していたが、早朝より突風と吹雪で春の嵐で大荒れだったので、天幕を撤収して美濃戸口へと向かう。

これより今回の山行の最大のハプニングがあった。駐車場に木村氏の車、本団氏の車を縦に停めて置いた

が、先に入っていた本団氏の車がウンともスンとも言わず、バッテリーが上がってしまった状態であった。全員で車を広いほうへ移動させたいが、やや下り坂の所へ停めて置いたのでなかなか広い場所にへ出ず、もう一台の車でケン引をしてバッテリーをつないでみたが、いくらやってもエンジンはかからずそうこうしているところへ同郷の藤代の山やさんが

『あら? 本団さんでは・・・』

と声をかえてきて、

『バッテリーあがりですか? だったらお手伝いします』との事でその御方は予備に大型のバッテリーを携帯していたのでチャージするがエンジンはまだかからず、今度は車を前面に停めてバジェロのエンジンをかけたままで、チャージしてみたがなかなかかからず、困ったナ~。ケーブルをつなぎ、充電せながらやったらやっとエンジンがかかりほっとする。一件落着である。その後風呂に入っても途中飯を食っても車のエンジンは切らず八郷まで帰る。

家に着きエンジンを切ってみると途中で充電されたとみて直ぐにエンジンはかかるとの事であった。

翌日、修理屋さんに見てもらい、大丈夫だと太鼓判を押してもらったが気前のいい本団氏は新品のバッテリーを2個も購入し、車につけたそうだ。

(菊池 記)



《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

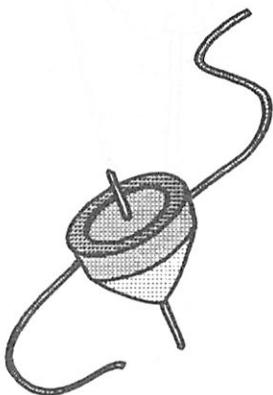
- Rohman No. 176 2000. 1. B5 48P 浦和浪漫山岳会
巻機ラットレ、万太郎ラットレ、日光湯元スキー場山スキートレ、総会資料ほか
- ◎ Rohman No. 177 2000. 2. B5 46P 浦和浪漫山岳会
冬合宿報告・燧ヶ岳ほか、
- ◎ Rohman No. 178 2000. 3. B5 42P 浦和浪漫山岳会
冬の集中報告・雨ヶ立山、足尾・仁田元沢ほか
- ◎ わらじ No. 526 2000. 1. B5 18P わらじの仲間
秋の集中・北ノ又川蛇子沢左候、谷川・白毛門ラットレほか
- ◎ わらじ No. 527 2000. 2 B5 32P わらじの仲間
冬合宿・朝日連峰、エズラ尾根、障子ガ岳ダイレクト尾根、古寺鉱泉～大朝日岳、大鳥～茶畠山～以東岳～大朝日岳、甲斐駒ヶ岳・赤石沢中央稜、白山北方稜線ほか
- ◎ わらじ No. 528 2000. 3 B5 18P わらじの仲間
新春ハイキング・奥武藏日向山ほか
- ◎ 遊遊 No. 104 2000. 1 B5 16P 遊遊渓礎会
丹沢・勘七沢、富士雪上、谷川・天神尾根、西吾妻山スキー、イ崎明日岳、丹沢・蘿釣山ほか
- ◎ 遊遊 No. 105 2000. 2 B5 10P 遊遊渓礎会
大中子山山スキー、上越ラットレほか
- ◎ 遊遊 No. 106 2000. 3 B5 10P 遊遊渓礎会
丹沢・水無川源次郎沢、八幡平山スキー、八ヶ岳・赤岳ほか
- ◎ Next! No. 49 2000. 1 B5 12P 山岳渓流釣り集団むげん
仲間の近況報告、友好団体の会報紹介ほか
- ◎ Next! No. 50 2000. 2 B5 12P 山岳渓流釣り集団むげん
仲間の近況報告、友好団体の会報紹介ほか
- ◎ Next! No. 51 2000. 3 B5 14P 山岳渓流釣り集団むげん
仲間の近況報告、友好団体の会報紹介ほか
- ◎ とまのかぜ No. 86 2000. 1 B5 15P 童人トマの風
西上州・立岩、房総・キンダン川、谷川・天神尾根、八ヶ岳・広河原沢アイス
クライミングほか
- ◎ とまのかぜ No. 87 2000. 2 B5 29P 童人トマの風
鎌崎山、千丈岳、甲斐駒ヶ岳・黄連谷左候、赤岳県界尾根、広河原沢アイス
クライミング、立科・春日渓谷アイスクライミング、尼ヶ禿山、八ヶ岳・硫黄岳、権現岳、阿弥陀岳
北稜、裏同じルンゼ、ジョウゴ沢ほか
- ◎ とまのかぜ No. 88 2000. 3 B5 25P 童人トマの風
かぐらみつまたスキートレ、コモリ沢アイストレ、茂倉岳北西尾根、日光白根山、
南ア・布引山、松木沢アイストレ、八ヶ岳・阿弥陀岳南稜ほか
- ◎ 山紫水明 No. 57 2000. 1 B5 8P 山旅の会
十二ヶ岳岩トレ、扇山ハイクほか
- ◎ 山紫水明 No. 58 2000. 2. B5 12P 山旅の会
米子沢、六ツ石山、湯河原幕岩ほか
- ◎ 山紫水明 No. 59 2000. 3 B5 12P 山旅の会
富士雪上、裏高尾ハイク、根子岳山スキー、丹沢・塔ノ岳ほか
- ◎ すずらん通信 No. 226 2000. 1 B5 12P 鈴蘭山の会
足尾・地蔵岳～たぬき山、八ヶ岳雪上、尾瀬・悪沢岳、武尊岳山スキー、八甲田山ほか
- ◎ すずらん通信 No. 227 2000. 2 B5 20P 鈴蘭山の会

藤原・山スキー&雪崩講習、秋田駒ヶ岳、笠ヶ岳、滝沢山~家老岳ほか
◎ すずらん通信 No. 228 2000. 3 B5 16P 鈴蘭山の会
樹峰、二岐温泉~大白森、吾妻・大沢下り、家向山~窓明山草津白根山ほか

会報

- ◎ ADVENTURE forum No. 1 2000. 1 A4 8P 植村記念財団・植村冒険館
平山ユージインタビューほか
- ◎ 講演とシンポジウム報告書 1999. 3 A4 55P 植村記念財団
1998年2月12日に行われたシンポジウムの記録
- ◎ むげん No. 10 2000. 2 B5 236P 山岳溪流釣り集団むげん
97年活動記録・岩や沢の記録22本。なげかけエッセイパート1とパート2。
平川水系集中の記録。98年活動記録17本。大洞川水系集中の記録。コラムほか
- ◎ 野良犬通信 Vol. 6 2000. 1 B4 チーム野良犬
青島靖氏個人の1998年版記録集。沢の記録は屋久島・鰐ノ川千寿滝右岸スラブなど24本。
アイスクライミングは南ア・荒川出合。山スキーは白山・三方崩山弓ヶ洞谷右俣など8本。ほか

以上閲覧したい方は本図まで



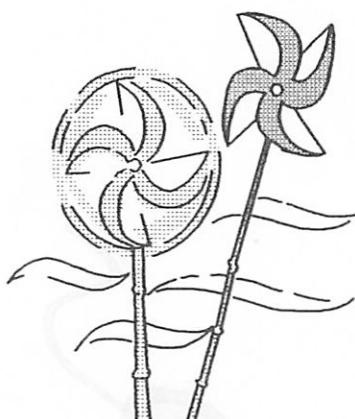
編集後期

今度、40号を機に編集者が変わります。今まで締め切りを大幅に遅らせて発行していましたが、40号以降は新しい編集者になることで、遅れることはないでしょう。また新しい編集者の新しい見方、編集の切り方で、もっと、もっとより良く（モア、ベター）なるでしょう。

“老兵は死なず、ただ消え去るのみ”。オールドタイプの編集者は、バージュンアップしていくR&Vをただ、見つめていくだけです。

『私は今回引退しますが、R&Vはこれからも永遠に不滅です！』って、まだあと40号まで4号あるか？……。最後の追い込みだ！。がんばらなくちゃ。

(編集長)



季報[R&V] 第36号 発行2000年 春

発行者：本団一統

発行所：ACC-J茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男

編集者：生井一男

印刷所：やまと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団